

Title	共生の敷居を変える「家族」のような場所：しょうないガダバ
Author(s)	山本, 晃輔
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 343-356
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68227
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

共生の敷居を変える「家族」のような場所

しょうないガダバ

山本 晃輔

大阪大学未来戦略機構第五部門特任助教



名称：しょうないガダバ

場所：豊中市庄内幸町

設立年：2015年

活動内容：地域の拠点として、まちづくり活動をおこなっている。月数回のイベントのほか、学習塾やセミナーなどを開催。未来共生プログラムとも関わりが深く、ガダバの住み込み管理人は履修生の井坂智人である。

写真1. 庄内ガダバの外観

1. 豊中市庄内のまちかどから

庄内地区は豊中市の南部に位置する。南端には神崎川が流れ、その先に大阪市がひろがる。神崎川、天竺川、猪名川に囲まれた旧庄内村は、豊富な水資源を活用した水田が広がっていた。旧農村の名残は、神輿や太鼓といった伝統芸能に今も残る。

庄内地区の中心には阪急電鉄庄内駅がある。1910年に大阪と宝塚を繋ぐ阪急宝塚線が敷設される。よく知られているとおり、駅周辺部を同時に開発していく阪急電鉄の経営モデルが完成された路線であり、豊中北部の開発が急ピッチで進められていった。庄内駅は1951年に地域住民の請願によって新設された。

戦後の経済成長期、大阪市域の開発、1970年の大阪万博、千里地域ニュータウンの建設等々、庄内地域は全国から集まる労働者や職人の集住地となっていく。高級住宅地として豊中北部が発展していった一方、庄内地域は下町情緒が魅力のひとつである。

田畑をつぶし、文化住宅やアパートが建設されていくにつれ、庄内駅は住民で溢れかえり下町としての賑わいをみせる。旧スーパーダイエーの大型店舗の実験店、私設市場、商店街、映画館、飲食店、スナックをはじめとする風俗街。梅田駅まで10分以内に到着する利便性から急速に人口が増加していった。

ところが、2000年代にはいると地域人口は、急速な減少傾向をみせる。区画整理が進まず、建築物の建て替えが進まなかった。高齢者が増加し、子育て世帯は地域外へ流出。100店舗以上の賑わいを見せた駅前の商店街も、現在では60店舗前後。シャッターを下ろすテナントもみられるようになった。

そして、区画整理の遅れを背景に、阪神大震災時には大きな被害を被った。戦後50年の間、大阪や豊中を支えてきた庄内地域は、徐々にその勢いに陰りが見られるようになった。家屋が老朽化したこと、廉価な賃貸住宅が集積したことにより、生活に困窮する家族が移り住むといった様子もあるという。南部地域の学校でいわゆる「荒れ」が散見されると、「怖い」地域であるとみられがちでもあった。市民活動が活発な豊中ではあるが、北部地域に比べて南部地域の団体は少ない。現在、豊中市も南部地域の再開発に着手し、学校再編や市民活動の拠点の新設が模索されようとしている。

2015年、しょうないガダバ(以下、ガダバ)は庄内幸町の一画で活動をはじめた。代表の小池繁子は主に豊中市北部で市民活動に携わってきた。小池は元保育士で海外生活の経験がある。小池のまわりには老若男女問わずボランティアが集まる。面倒見のよさと、度量の広さに惹きつけられるのである。拠点のひとつは阪急岡町駅にあるコミュニティカフェ kitto だが、小池は豊中南部地域で活動を展開するためガダバを開設した。ガダバはNPOのような定款を有さない私的な活動である。「私的だからできる活動である」と小池はいう。ではなぜ「私的」である必要があるのか。そして私的な活動が、公的な場においていかなる役割を担っているのか。本章ではガダバが取り組む「共生」について紐解いてみたい。

2. しょうないガダバと未来共生プログラム

これまで、未来共生プログラムとガダバは3回の連携をおこなっている。未来共生3期生の増田智香、4期生の富安皓行、そして2017年度はプロジェクト・ラーニングに取り組んだ。履修生は「しょうないガダバとはいかなる場所なのか」「いかなる居場所なのか」というテーマを設定して取り組んでいる。

また、2015年、2期生の謝振が小池のkittoで公共サービス・ラーニングを行った。法学を専攻する謝にとって、地域活動に参加することはこれまでになかった経験であった。小池は謝の希望や興味関心に寄り添い、地域住民に引きあわせていった。謝は公共サービス・ラーニング終了後、「みなさんにご紹介したい」といって筆者や他の履修生を連れ立って岡町に繰り出した。喫茶店や雑貨店をめぐり、地域の方々に挨拶をしていった。書籍や法文書を読み解くだけでない、地域の方々に可愛がられ応援される謝の姿があった。謝にとって小池のkittoは、安心して活動を行うことができる場所であった¹。

このように、小池は人を巻き込むことが上手い。それも戦略的なものではなく、「みんなで楽しくやればええねん」というのが小池のモットーである。ある日、小池に呼び出された筆者と履修生は「活動を広げたいがボランティアがすくない」という話を聞いた。小池はカフェを運営する傍ら、経済的な厳しさを抱える子どもたちを対象に学習塾を運営していた。南部地域の子どもたちは電車に乗り北部の学習会に参加する。南部地域で活動を展開しようとしても、利用しやすい拠点が無い。

大阪大学が所在する豊中は大阪のベットタウンといったイメージがある。例えば住宅関連のチラシには「北摂でのゆとりある生活」といった言葉が踊る。豊中の南部地域に生活上の厳しさがあるということは、筆者にとってはじめて知ることだった。そこで、庄内を1期生の井坂智人と訪れた。まち歩きをした後、駅近くにある立ち飲み屋で井坂は「下町ですね。けどすごしやすいぞうだ」といった。

井坂が小池から連絡を受けたのはその数週間後である。「庄内に手頃な一軒家を借りれることになった。もし良かったら常駐の管理人として住んでもらえないか?」というのである。2015年秋口から改装がはじまり、11月にしょうないガダバがオープンした。初代管理人は未来共生プログラム1期生の井坂。「家

賃が少し安くなりましたが、電気代は高くなりました」と井坂は苦笑いしていた。小池は、「誰かが住んでもらうのが一番だと思ってん。住人がいれば誰かがかならずその場にいてくれるから。なにかがあったときに安心やし。折半すれば安くもなるし。ガダバはお小遣いの範囲の活動。誰か探してたら、謝さんが井坂くんを連れてきてくれたから。井坂くん、おもしろいこと好きそうだったからいけるとかってん」と当時を述懐する。後に筆者も庄内へと転居した。「みなで楽しいことをする」という小池にのせられたからである。

3. しょうないガダバの取り組み

しょうないガダバは豊中市南部地域、庄内幸町にある。二軒長屋を改装した戸建て。入口のガラス戸を引くと6畳の土間、1階は風呂、トイレ、台所がある。傾斜45度の急な階段をのぼると10畳程度のスペースがあり、奥に小さな管理人用の小部屋がある。築50年。ガダバをオープンさせるための改装を行ったが、きしんだ床ではビー玉がコロコロと転がる。どこからともなく現れるネズミが残飯をあさる。

建物の家賃・光熱費は、小池と井坂、そしてガダバを拠点に活動するNPO団体が折半する。運営はしょうないガダバ実行委員会が担う。定期的な会議は存在しない。利用者は「ガダバー」と呼ばれるメンバーに加わるが、明確な登録制度はない。一応の決まりとしてガダバ利用者から利用料を徴収することになっているが、こちらも曖昧といえば曖昧である。次節でみるように、明確な規約やルールが存在しないところがガダバの特徴である。

ガダバのリーフレットには、活動のコンセプトとして、「(1)さまざまな文化や背景をもつ人たちが集う場所。(2)誰もが自分らしくしあわせになるための場所」という記載がある。そしてビジョンとして、「(1)いろいろな背景や文化を持つさまざまな人たちが、ちがいを越えてともに生きることができる場所を作ること。(2)すべてのひとが健康で安全に希望を持って、生きるために必要なモノ・コト・ひとの提供。(3)さまざまな情報を収集し必要な人たちへ情報を発信すること」とある。「おもしろそうだから誰かが集まって。いろんな人に使ってもらえたらいい。交流の場所」と小池がいうように、ガダバは誰もが使いや

すく、繋がりを深められる場を目指している。

定期的な活動として、とよなか国際交流協会と連携し、ひとり親、外国人家庭のこどものための放課後塾が週2回開催されている。NPO法人TENとの協働で、若者支援を行う人たちを対象とした相談会が週3回。月末には「ちゃぶだい集会」と称した若者支援の会合がある。ガダバの自主企画として、土曜日には地域の子どもたちを対象とした駄菓子屋が行われる。また不定期活動として、専門家を招いた「ガダバアカデミー」、海外旅行者が滞在する「カウチサーフィン」がある。筆者も「大阪大学×未来共生」という大学院生の発表会や、まちづくりの書籍を読む「まちの読書会」を開催した。

こうしたイベント型の取り組みとは別に、ガダバは「居場所づくり」を活動の柱としている。リーフレットにも、「学習支援&居場所づくり」「自分らしく健康で幸せに生きるための知恵と学び、居場所づくりをすすめます」と記されている。様々な事情から宿泊を希望する若者の受け皿としてガダバが利用されることもある。ときに利用者が、不登校、精神的な苦しさ、親との軋轢等々、現在の生活の苦しさや辛さを打ち明けることもある。交流の場所であるガダバはとりわけ社会において居場所がないと感じる若者を受け入れようとしてきた。

ガダバの活動は近年流行する「ワーキングスペース」のように、誰もが気軽にイベントを開催できる「活動の拠点」と、利用者にとって居心地の良い「居場所」といった大別すれば2つの活動がおこなわれている²。



写真2. ガダバでは月数回、誰もが参加できるイベントを開催している。

これまで、未来共生の履修生の多くは、「居場所」としてのガダバに注目した。2017年度のプロジェクト・ラーニングでは、「居場所としてのガダバ」を探り出すことを目的に据えた。履修生にとってガダバとは居心地の良い場所であり、利用者がなんらかの帰属意識をもってガダバに参加しているようにみえたのだろう。

他方で、利用者である筆者は、ガダバを居場所と考えたことは一度もない。管理人である井坂も「自分は利用者のひとり」と、ことあるごとに語る。若者支援活動に携わる常石は「フラッと立ち寄る人もいる。寄っていく場所」とガダバを位置づけ、居場所やサードプレイスといった表現とのズレを感じているという。小池も「自分の居場所といわれたらガダバとかいろいろあるけど、家(自宅)」と語っている。

公的活動スペースの利用には煩雑な手続きが必要である一方で、ガダバでは手続き的なものはほとんど存在していない。理念や目的を共有する人とのゆるやかな繋がりや学習の場としてガダバを利用するとき、個人的な愛着や帰属の場所というよりも、活動の目的に適った場としてガダバを捉えている。ところが、小池はガダバを「パブリックな場」「交流の場」とするとともに、「居場所」「家」でもあるという。公共的な活動の拠点としての側面がある一方で、プライベートで親密な側面が両立するということは、直感的に理解できるものであっても、若干の違和を感じてしまう。それでは、ガダバの「居場所」とはいったいいかなるものなのだろうか。

4. ガダバが考える居場所

「居場所」という言葉は、「子ども・若者にとって」という意味で1980年代頃より使用されてきた。不登校が社会問題化していった時代、フリースクールの開校など、学校で息苦しさを感じる子どもたちを包摂する場として、居場所は注目されてきた。田中(2001)は、子ども・若者にとっての居場所を「他者との関わりの中で自分の位置と将来の方向性を確認できる場を意味する」と位置づけている。義務教育課程を経た大学進学と終身雇用を前提とする就職といった「モデルケース」が崩れる一方、「自分らしく」が強調される時代にあって、「ど

のように生きればよいのか」がわからない子ども・若者が社会関係結び直す場として居場所の必要性が訴えられてきたのである。

さらには、居場所は子ども・若者以外にも必要としている人々がいるという議論もある。阿部はリタイヤ男性、高齢フリーター、家族、恋愛、ヤンキー等々、社会的属性、年齢、世代を超えた居場所のあり様を概観し、居場所づくりを「社会的に排除された人々を再び社会に戻していく『社会的包摂』の実践である」と定義している(阿部 2011: 4)。いずれの定義においても、居場所とは社会的に自閉するような場所ではなく、社会的な繋がりを醸成する場として構想されていることがわかる。

それではガダバの居場所とはどのようなものなのか。ガダバでは利用者が少ない日時を中心に、海外からの旅行者を受け入れている。その日もイギリスからの旅行者が、お寺での修行を終え土間でくつろいでいた。その旅行者を何人かの若者が囲んで笑い声があがっていた。いずれも語りづらい悩みを抱えている子どもたちであった。かれらがホワイトボードを片手にあれこれとおしゃべりに花が咲く。旅行者は日本語を話すことが出来ない。若者も英語を話すことが出来ない。小池はそうした光景をみて「ガダバを作ってよかった」と心から思ったという。わざとらしくない出会いがあると感じたからである。

未来共生の履修生が自身の研究を熱く語った学習会には、大学に通えなくなっていた学生が参加していた。途中まで無言を貫いていたが、最後に「大学にもこんな変わった人がいるんですね」と呟いた。普通ではないと悩む若者が、「変わった」利用者に出会うことで、自分の「普通ではない」を許容できるようになる。自由な出入りが担保できているからこそ、ガダバでは「社会関係の結び直し」の光景がしばしば見受けられるのであろう。このように、交流の場であるガダバは、誰もが参加できるパブリックな活動をおこなう拠点でありながら、居場所として社会的な繋がりを醸成する場所なのである。

小池が南部地域で活動を展開しようとしたのも、誰にも語れない悩みをもつ子どもや、行き場を失ってしまった若者の存在があったからである。実際、小池のもとに「うちでは面倒がみきれない子がいるのだけど、1週間くらい泊めてあげられる場はないでしょうか?」という問い合わせがある。なんらかの理由でガダバ以外に行く場所のない若者が駆け込んでくることもあった。ところ

が、こうした深刻にみえるケースでもガダバは利用上のルールを設定しない。受け入れにあたっての会議が開催されるわけでもない。

他方で、前回特集（『未来共生学』第4号）でみたように、マイノリティ集団にとっての居場所とは、自分たちの安心・安全が守られる場所であり、マジョリティからの避難所という側面がある。こうした場合において居場所とは、プライバシーを確保し、個人的な「苦しさ」から若者を保護する場所となる。社会から隔離された自分たちの安住の場であるがゆえに、利用上のルールや排他的なメンバーシップが重要とされるのである。こうした観点にたつとき、ガダバの姿勢は成り行きまかせにみえてしまう。

小池が関わる他団体は、市民活動団体として非常に洗練されている。ところが、ガダバの実行委員会に明文化された手続きは存在しない。小池は旧来の市民活動の手法を意識的に持ち込まなかったという。「(ガダバの実行委員会は) いえば形だけ。かといって聞かれればガダバ実行委員会の代表の小池ですと答えるけれど、私の団体ではない。普通のNPOとか団体とかとは切り口が違う」

ではそれはどのような「切り口」なのだろうか。若者活動に携わる常石は次のように語っている。

「ガダバにいると見えないニーズがあると感じます。世の中にはいろんな団体や活動があるのに、ガダバにくるのはなぜだと。見えないニーズをどうすくいあげるかは難しい。だから誰でも寄っていける場にはそれなりに利点があると思いました」

常石によればフレキシブルな活動であるからこそ「見落とししてしまう、見落とされてきたニーズ」をすくいあげることができる。そして、そのためにも明確なルールや基準は不要なのではないかという。敷居を可能な限り低くすることが、ガダバの手法なのである。小池も現在のガダバのやり方が必要とされているはずだという。

「基準を設けてしまうと、その基準を守らなくちゃいけなくなる。そういう『しっかりした団体』はすでに存在している。自助グループ、フリースクールだとか、シェルターだとか。必要なときはそういう場所に繋がればいい。けれど、そういう場所に行く前の『ケース』がある。そうしたとき、ルールが足かせになってしまう」

小池は社会関係の結び直しを、可能な限り敷居の低いなかで行おうとする。そのために、ガダバは可能な限り理念や目的を明確化しないことで、より多様な課題に向き合おうとしている。多様な人々が過ごしやすくなるため、あるいは少数の人々が過ごしやすくなるため、「貧困」「不登校」といった他者とのちがいを明確化するルールや区分を設定しないのである。利用者がガダバの意義や意味を考えるためにガダバは自らを定義しないのである。

5. パブリックな空間にプライベートを織り交ぜる

ガダバの敷居を低くするというところに課題はないのだろうか。市民活動にとって、活動理念やミッションは欠かすことが出来ない。公的に活動する法人である以上、対外的な目的が問われることは必然であろう。そして自立した「市民」による熟議と合意形成は、市民社会の成熟を促す。こうした観点から、内輪の「お仲間集団的な社会活動」に留まる「コミュニティ活動」や「まちづくり」を批判する論者もいる(竹井 2009)。

ガダバはパブリックな場において活動を行う拠点であっても法人ではない。活動理念は設定されているが、それも不変のものとして捉えられていない。利用者が決めれば良いというスタンスであるが、利用者が相談する場はない。曖昧な目的意識を共有したゆるやかな繋がりを鑑みたとき、「お仲間集団的な社会活動」を地で行く場所のようにみえてしまう。責任主体も明確ではない。

「超私的な活動だからできることがある。私塾みたいなもの」と小池はいう。前節でみたように、フレキシブルに動くことができるからこそ対処できるニーズがある。そのため公的な助成金を受けていない。なんらかの組織づくりや説明責任を求められることで、硬直的な組織になることを避けるためであると、小池は説明する。「町のなんでもあり(多様なニーズ)に対応するためには、なんでもありじゃないと難しい」というのが小池の論理である。

しかし本当に「なんでも」ありなのだろうか。これまで、筆者の知る限りにおいてガダバでは今後の方針や活動を巡って2回、議論の場が設けられた。その場で、それぞれが意見を述べるが、明確な方針や規約がない以上、意見が集約され合意が形成されることはなかった。そして、最終的に小池の顔を見ること

になる。ガダバは名目として「なんでもあり」「ルールのない場所」を標榜しながら、結局のところは小池の意向で方針が決まるのだろうか。

常石は慎重に言葉を選びながら、「ガダバは小池さんの活動ではありません。なにかがあればみんなで決めます。みんなといっても最後は小池さんかもしれません。むしろ小池さんがいる、そういう安心感があります。ここは利用者が責任を負う場所ではなくて、寄っていく場所ですからね」という。

筆者も常石と同じ印象を共有している。ガダバに持ち込まれる課題とは、そもそもパブリックな空間では解決できない事柄である。そしてこうした課題の多くは、往々にしてプライベートな悩みや生きづらさである。そしてそれは合議では解決しにくい課題のときもある。

例えば、なんらかの犯罪をおこした若者が行く場所を失ったとしても、おそらく小池やガダバは受け入れようとする。外国人のための学習会を開催する場所でありながら、外国人を差別するような書籍を読む利用者を直裁的に咎めたりしない。「その子の価値は1回の過ちで決められるものではない」からである。そこには一般的な倫理や規範をこえた、困っているならば助けようという基本姿勢がある。「そうしたケースは、この場所では難しいですね」といった「お役所的」な基準がない。

私たちは社会となんらかの契約を結んだわけではないが、ルールや規範の遵守が求められる。「共生」もまたそうした側面を有する。文化や社会的属性の多様性を前に、それを棄損しないためのルールや制度をつくりあげることが喫緊の課題である。

他方で、小池は、その言葉を借りれば「性善説」をもって他者と向きあおうとする。「みんなで決めなきゃいけないことって、ガダバを使う限りそんなになんじやないかなって思う。人としてのルールがわかればいいと思う」と語る。ここでいうガダバ利用者が守るべき「人としてのルール」の基準が小池にはあるように見える。

小池が醸成するガダバの雰囲気とは「家族」である。旧態依然とした性別役割的な比喩でいえば、小池は「母」のように他者を受容する一方、「父」のように暗黙のルールをメンバーに課す。例えば、黙っていても食事が出てくるかもしれないが、「いただきます」とは言わなければならないように、空気を読むことは

求められる。みなを受け止める「母」でありながら、口数少なくみなを見守る「父」のような「おせっかい」な存在を、大阪では「オカン」と呼ぶ。小池はみな「オカン」なのだ。小池はいう。

「私たちには想像ができないようなしんどい経験をしている子どもや若者がいる。ケアも必要だけど、そういう子どもや若者もいわゆる普通の人と一緒にいれる場所が欲しかった。そういう場所を目指したいと思っていた。『家』とか『家族』といえどそういう場所にいるんな子が、自然と生活できるような場所が欲しかった」

小池を血縁上の母のように慕う人は筆者の知る限り見受けられないが、「オカン」として捉えている利用者は少なくない。「小池さんが嫌な顔をしなければいいだろう」といった状況は、誤解を恐れずいえば「オカン」を頂点とする家族的な空間である³。

それではなぜ公的な場所に私的な雰囲気や、家族的な関係性を持ちこむ必要があるのか。小池には明確な「実感」が存在しているように筆者の目にはみえる⁴。その「実感」とは、私たちはぶつかりあうこともあるが、基本的にはわかりあい、助け合って生きていけるはずというものである。

持ち込まれる私的な課題を、全員当事者という私的な助け合いによって解決できると小池は「実感」し、信じている。家庭に戻れば、ゆるやかに私的なものを共有し、譲歩し、認めあおうとする。ときにそれが息苦しくなるのも、家族とは全員が当事者だからである。だからといって、本稿を通じて「家族」の重要性を改めて強調したいわけではない。あるいは「親なるもの」という超越的視座が、価値の葛藤を調整するといいたいわけではない。みな当事者になるため、なによりそれが苦しいものとしなないための雰囲気を作ること。しがらみなく共生するのではなく、しがらみを共有しながらそれをわかちあうこと。これが家族的、オカン的なものの正体である。「ガダバはみんなの家」「私たちは家族である」と豪快に言い放つのも、これらの言葉が有する社会関係を今一度結び直す必要があると小池が考えているからである。

敷居を低くしつつ、家族的な雰囲気を持ち込むことは一見すると矛盾する。しかし、家族的だからこそ切り結べる関係というものがある。私的な問題を公的に解決するのではなく、公的に解決できない問題だからこそ、私的にしか解

決できないことがある。それゆえに「人としてのルール」といった曖昧な基準を巧みに運用し、抗いようのない「オカン」がまとめあげる。「オカン」が最終的には決めてくれるだろうという曖昧さがあるからこそ、気ままに自己主張することができ、フラットな関係でガダバを利用することができるのである。

6. 家族的な関係への回帰がもたらす共生

共生社会の柱が公共的な場の維持・確保であるとしたとき、その成員は、例えば「ジェンダー」や「家族」など旧来の価値観を相対化しつつ、フェアで公正な市民として位置づけられがちである⁵。公的な場では、個人の趣向に先立つものがある。NPOをはじめとする公共的団体が「ルール」や「ミッション」を明文化し、情報を積極的に公開するのも、組織の独占や独裁を許さないためである。

ガダバは「誰もが参加でき、自由に活用できる」といったパブリックな社会空間を標榜としながら、なにもかも自由にできるわけでもない。小池は「ルールさえ守れば自由に使ってくれてええで」という一方で、「人として守るものはある」ことを強調する。ところが、どのような「ルール」なのかは「人として」という曖昧な言葉によって覆われている。自由でありながら、家族的な雰囲気を持ちこむガダバの手法は独特である。

しかし、「ルール」や「価値観」を曖昧なものとするがゆえに、ガダバでは自由で公的な活動と並列して、私的で切迫した苦悩が持ち込まれる余地がある。小池は「この場が誰にとっても必要とされているとは思えない。(ガダバの雰囲気が)嫌だという人もいると思う。通り過ぎる人がいてもおかしくない」という。常石もガダバを「寄っていく場所」という。公的な場所で明確なルールのもとで「守られている」と感じるからこそ話せることがあるように、私的な場所でまきこまれる形で「家族」となるからこそ語れることもある。既存の場所では受け入れられない葛藤を、ガダバという場所は一時的に受け入れようとするのである。

「共生」とは、フェアで公正な市民によって担われるかもしれないが、私たちはフェアで公正な存在というだけでなく、個としてのあり様に苦悩する世俗を生きる存在である。好き嫌いもあれば、他者を妬み僻むこともある。それゆえに、逆説的ではあるが「共生」とはなにかを問う必要があるのだろう。

ところが、公的な場において、私的な価値観や趣向が退けられるとき、私的な事柄に悩む個人は、解決の糸口を見つけれられないことがある。例えば「その問題や振る舞いはこの場では適切ではない」というように。あるいは、「日本人と外国人」「健常者と障害者」「男性と女性」といった価値観が衝突しがちな課題もある。私たちは「俗」としての人間であるからこそ「ルール」を策定し「価値観」を調整しようとする。それが、ときに当事者と非当事者を選び分ける基準となってしまう。そこで、ガダバは適切とされる基準やルールをもって整理せず、「オカン」が「まあ、人としてルールを守ればええやろ」と、物事の一切を包摂してしまうのである。

こうした小池の理念は、ガダバに深く浸透している。ともすれば「公的」なものとして強調される共生社会にあって、しょうないガダバにおける共生のあり様は、「公と私」の関係を捉え直すものとなっている。それは、「私」の問題を直視することであり、「私」の問題を「公」だけが解決できるわけではないということである。あるいは「共生」という言葉で参加者を弁別してないか、という問いでもある。筆者は、公的な場における「家族的なるもの」を個人的に忌避しているが、ガダバが温める家族のような関係の必要性と取り組みは理解できる。そしてそれが、共生の敷居を変える役割を、町中で担っているのである。

注

- 1 その後、謝は地域の私立保育園にボランティアとして出入りするようになり、現在では活動を支えるひとりとなっている。
- 2 近年のまちづくり論において、誰もが使用できる「場所」「ワーキングスペース」の重要性が議論されている。こうした場作りにおいて田所(2017)が重要であると指摘する「協働的コワーキングスペース」と「別世界の接触空間」の両面をガダバは有する(田所2017: 136-138)。しかしそうした場をどのようにつくりあげるのかという点とパブリックに開きすぎない場の必要性という点に違いがあり、ガダバは限られたメンバーによる開かれすぎない活動を中心としている。
- 3 「家」を共有する行為のひとつにシェアハウスがある。久保田(2009)はシェアハウスを「家族でも独りでもない生活」スタイルとして位置づけ、そのルールは共有スペースにおける「ゆるやかな政治」によって構築されるとした。こうしたシェアハウスと比べたとき、ガダバは小池を中心とした「家族への回帰」に見える。しかしながら、この社会から「血縁家族」や「家族規範」が消えないように、「家族」を求める人たちもいる。そのようなガダバの雰囲気は、論

理的な帰結ではなく実践的必要性から生じたものである。

- 4 ここである「実感」とは松田(1999)の議論による。松田は日常生活をともにし、歩み寄り実践に、異文化理解における共役不可能性を越えた交流・交感が存在すること指摘している。松田は研究者にとって非客観的で実証的ではない「実感」を議論の俎上にあげているが、これは市民活動においても検討されるべき課題である。なぜなら、市民活動の場においても客観性や実証性の波が押し寄せ、称揚される傾向にあるからである。生活をともにすることによる「実感」は、社会的属性や「ターゲット」「ミッション」を越えた「かかわりの基盤」になり得る。元来、乱暴にもみえる「実感」に基づいたアクチュアル、あるいは「おせっかい」な人びとが、他者との違いをとりまとめてきたからである。
- 5 公共的活動の「参加者」は「活動の理念に賛同する市民が参加する」として等閑視されがちである。しかし「誰が」市民活動に参加するのか、どのような人が活動に求められているのかは、十分議論されていない。牧田(2007)は行動科学の立場から、旧来の議論が自律的・理性的判断を行う「規範的市民」にばかり注目し、喜怒哀楽に流されがちな「実態的住民」を捨象してしまっていることを指摘している。また、ボランティア参加者の社会階層にも偏りがある。日本の市民活動参加者の変遷を分析した三谷(2015)は、高学歴層に支えられてきた「ボランティアの階層化」と経済的なゆとりを有する管理職層・無職層の離脱による「ボランティアの脱階層化」が生じていることを実証している。

(敬称略)

参考文献

阿部真大

2011 『居場所の社会学 ― 生きづらさを越えて』 日本経済新聞出版社。

久保田裕之

2009 「若者の自立/自律と共同性の創造 ― シェアハウジング」 牟田和恵編 『家族を超える社会学 ― 新たな生の基盤を求めて』 pp.104-136、新曜社。

竹井隆人

2009 『社会をつくる自由 ― 反コミュニティのデモクラシー』 筑摩書房。

田中治彦編著

2001 『子ども・若者の居場所の構想 ― 「教育」から「関わり」へ』 学陽書房。

牧田義輝

2007 『住民参加論の再生 ― 空虚な市民論を越えて』 勁草書房。

松田素二

1999 『抵抗する都市 ― ナイロビ 移民の世界から』 岩波書房。

三谷はるよ

2014 「市民活動参加者の脱階層化」命題の検証 ― 1995年と2010年の全国調査データによる時点間比較分析』『社会学評論』65: 32-46。